

2・2 協定と私

(1) 学生運動との出会い

重信房子

学生運動との出会いは、1965年、明治大学の入学式の前に始まりました。合格通知を受けて、入学金を払ひ込みで駿台の大学を訪れた時です。駿台の大学院舎の前のお茶の水の一番通りの多い一角にマットレスを敷いたよれよれの身なりの男達が、ハンドマイク片手に座り込みをしていました。何事だろうかと話を聞いてみると、学費値上げ反対闘争に立ち上がった上杉君という学生が退学が除籍処分になった事に対し、復学を勝ち取ろうという座り込みでした。しかも、本人達の学費値上げに対する抗議ではなく、つきの世代の人々のために反対して処分を受けたというのです。キッコーマンの会社に居た時からマナーで、スーツやお化粧や、きちんと格好つけていたちだつたけれど、「一緒に抗議に座りませんか!」という呼びかけに思わず、断る理由もなくて座った事から、私の学生運動は始まりました。

断る理由もなくて共同し、共同の中から何かを見出しへもう一步進んでしまう……そんなふうに、私自身の学生運動が、どんどん深くなつて行ったように思います。

当時の学生運動は、60年安保を経験したという化石化の

ようなオジサンとは言つても、5、6歳しか違わなかつたけれど、当時の年齢感覚で言うと、越えられないほど年の差のように感じたけれど)が數人居て、ガリ版のインクの匂いが溢れる雑然とした自治会室の薄暗いア

ジトに陣取って、日共、民青批判ばかりしていました。

60年安保の時には、日米安保条約に抗議して、小出学

長以下駿台の大学正門をロックアウトして、紫紺の旗を

うち立てて、「おお、明治!」という校歌を歌いながら、

国会に突入したと言います。その栄光の明治ブントの話

は、暗い自治会室でとぐろを巻いたような年長の活動家から、繰り返し聞かされました。

「それがどうしたの? 今、何をするの?」私達新人

の幾人かは、そうした質問しかできませんでした。栄

光の過去は過去として、今は、彼等と対する勢力であ

る日本共産党系の人々に、二部の中央執行委員会である

学苑会は牛耳られています。どうしたらしいのでしよう。

また、日共、民青の人々も、新入生である私を必死にオルグして来ました。新入生である私には、何も詳しいことは判らないが、お互いに批判し合つているということはよく判りました。

「学友の皆さん!」と、きちんとした身なりで、理路整然と語りかける日共系の人々と、「我々は!」と一方的な意味不明のアシ演説を繰り返す三派系のスタイルがあり、お互いに時々暴力的にぶつかる事もあるらしいことが、1年生の私達にも段々判つてきました。汚い格好で、大学院前で座り込みをしていた上杉君という人が中核系の人で、その仲間がブント系の人々だということが判りました。(当時は、中核もM-Lもブントも仲間でしたから)。

入学と同時に「学友の皆さん!」と、「我々は!」の両方の人々がクラスオルグとして日々授業前に教室に入ってきて、自分達の主張を繰り返します。当時のテーマは、日韓条約に反対することと諸要求とする三派系と、学園闘争の自衛を求める日共系の主張でした。もうすぐ学生大会が開催されるので、その代議員を選ぼうとする日共系と、日共系学生大会は不當で認められないでボイコットすべきという三派系の主張が、私達文学部史学科を巻き込んでしまいました。他のクラスも同じだった

と思つたけれど、三派系に日共系の人が居ました、訳の判

らない人が大多数でした。「私達のクラスは、今、何が何だから判らないから、先づ今はオブザーバーを大会に

出して、その報告を受けて、私達史学科その後、どちらにどうすべきを決めよう」という意見が多數を占めました。私もその意見でした。そして、できるだけ史学科

クラス全員がオブザーバーとして大会に参加しようと決

めました。

私はそれで、一部終始見ていきました。正直だけど自

分勝手で自己満足的な三派の人々、一票の欺瞞性などど

うでもいい日共系のボーザ。どちらもだめだけど、欺瞞

より正直を選びたいと私は思いました。どうして合法的

に執行部を取り返そうとしないのか? と三派系の人々に聞くと、「勝てっこない」と、平然とした答が返つてき

ました。その時、私は、絶対正直が勝つべきだし、正直

が勝つよう構想を練るべきだと思いました。

先ず、基本は自治会の学生達に大いに語ること。文学

部に入つて活動することになりました。

当時、対案を提出した研究部連合会(サークルの連合

自活会)の執行部として、人事まで考えていました

が、三派の友達の意見を聞いて、人事案まで提出し

ようということになり、対案を出す以上、自分達が抜け

るのは責任上まずいということで、党派層のある人を説

得して執行部に入つてもうと同時に、私も二部の執行

部に入つて活動することになりました。

私はそれと並行して、学費値上げ反対闘争とブント

で学習しようとしたと決めたのに代議員席に座つて、ストライキで闘つた。私は中居ました。全学自主投票によつて、ストライキの正否を決めるべきだと日共系執行部は提案しました。でもその人はクラスを代表していません。私は

当然の主張をしたはずのですが、「黙れ!」トロツキ

スト!』と、日共系代議員に発言を遮られ、果然こしま

した。その時、軍手にジャンバーの一团20人くらいが脱

兎のこじく議長團に向つて突進し、議長以下壇上に居た

執行委員達をボカボカ殴り始め、「発殴った後、「この

大会は不當だ!」「我々は闘う!」などとシユプレビコ

ルを繰り返し、肩を組んで「あainターナシヨナル、

我らがもの」とインターを気持よさうに歌うと、整列

して、デモ行進しながら意氣揚々と退場しました。クラ

スの大半は、それに拍手で応えています。

一団が退場すると、日共系の高橋執行委員長は、倒れ

て倒れていたのですが、ゆつくりと殴られた顎に手をやりながら、「学生諸君! 学友の皆さん! 見ましたか? あれがトロソキスト暴力集団の姿です! 彼らは破壊者なのです。さあ、学友の知恵と力で、暴力に負けず、民的な学生大会を成功させることによって、我々の正當さを示しましょう!」そして、大会は続行され、私のクラスの選ばれなかった代議員も以降決議に参加し、大会は、成功裏に終了しました。

私はそれで、一部終始見ていきました。正直だけど自

分勝手で自己満足的な三派の人々、一票の欺瞞性などど

うでもいい日共系のボーザ。どちらもだめだけど、欺瞞

より正直を選びたいと私は思いました。どうして合法的

に執行部を取り返そうとしないのか? と三派系の人々に

聞くと、「勝てっこない」と、平然とした答が返つてき

ました。その時、私は、絶対正直が勝つべきだし、正直

が勝つよう構想を練るべきだと思いました。

先ず、基本は自治会の学生達に大いに語ること。文学

部に入つて活動することになりました。

当時、学費値上げ反対闘争は、社会的・客観的に様々な要素

をもつて、早稲田に始まり、全国的に私学の仕上げとし

て全国化してきました。

当時の経済成長路線は、大量生産・大量消費の上昇過

程があり、本格的に産業構造の革新と、それに見合つた

期待される人間像や、産業にふさわしい教育再編・管理

など、文部省の動きもありました。また、学生運動の中

では、60年安保を開つたブントが、「安保が潰れるのか、

ブントが潰れるのか」という闘いの後、四分五裂して、

いつたん停滯期に入つて、これまで活動して

いた反日共系の人々が統一していく動きが生まれてき

ました。

大嘗法に反対する動き、60年代のベトナム戦争に反対

する国際的な動き、日韓条約に反対し、日本の戦争責任

を問う動きなど、新しい流れに乗つて、これまで活動して

いた反日共系の人々が統一していく動きが生まれてき

ました。

大学祭で、音楽や演劇、詩が生まれ、文化交流し、明

治では、当時友達の多かった応援団も共同してキヤン

値上げ反対の学生側と理事会との交渉は記念館で行なわれますが決着をみませんでした。

野球部の島岡監督が黒龍会人脈と噂される中、島岡監督の指揮下、体育会系サークルを中心に、団交の席に殴り

左翼を恫喝・リンチするなど暴力沙汰が始まりました。応援団が間に立つて、対立を解消しようと努力しましたが、緊張は一触即発で、幾助隊が正門の前に寺發する事

態が続きました。白色テロとして、体育会系の学生に拉致され、小川町校舎の柔道部の道場に連れ込まれる事態など、日々対立が拡大していました。私自身も、右翼に

捕まりましたが、小学校の友達がちょうど柔道部に居て、助けてくれたこともありました。

これは朱彌明治大してではなく、日本、中大、法政などお茶の水神田周辺の各大学同じだつたでしょう。当時は、どこでも自主管理大学で、みな自主カリキュラムで、大

学間で共同したり、自由な自治を育てていたと思います。同時に右翼との対立は、日大で早稲田で、どこも明治以上の厳しめの攻撃が流れていました。そして、明治大学が

今後どういう方向でこうした対立に回答を与えていくのか？ というブントにとつても大切なことになつていま

再建全学連の委員長であった明治のブントの人々は、中核派とかの競合の中で、明治の自治会としての指導性

が、ブントの存命としても問われていると考えていたようす。

私を 当時 フントの人々は M.L.シンバだとと思うし、M.
L.派の人々はブントのシンバと思っていたようですが、
私自身のスタンスとしては、党派のやり方にあまり感心

しない面があつて、さそわれ、オルゲされるけれど、党派活動には入つていませんでした。党派の人々は、自ら台を大切にしないとか、学生大好きというところが、了見

会で決めたことを党派の圧力で変更できると考えている
ような横暴な考えがちらつくし、また、たまたま、人間

として、父の言うところの「人物だ」と思わせる人が居なかつたからかもしれません。

(3) 2・2協定と私
明治大学の学費闘争は不幸な間違った結末を迎える、そのことが、私をブントへと入って行くきっかけを作りま

(3)

を迎えて、そ

議を提起したのです。

理事会側と妥結したという署名に名をつられた當時の中執委員長他数人の人々は蒸発したようになってしまいました。他党派に自己批判しつゝ、ボス交した奴らを許さんと、早稲田社学同を中心にして走りまわって、斎藤執

かしま

来たら、オレの名前を言えよ」と、私に殴られない方法を教えてくれました。そんな攻防の中で、少しずつ明大社学同の人々が、中大を拠点にしながら明大・社学同の再建をしていくようでした。

これまで党派活動を拒否していた私に早稲田のMさんと、「こんな時だから社学同と一緒に再建しないか?」とさそい、オルグしてきました。そうか、こんな時だから新生、再生、何かを生み出せるかもしれない。そして、私自身も傍観者でなく、もう一歩踏み込むところから考える時なのかもしれない。改良、革命、そして民主主義、この三つの言葉を、2・2協定の中で考えたことをとして、これからも考えることばにしよう、そんなことを考へながら、社学同の加盟書にサインしました。多分、それは、今につながる人生への出発だったような気分します。

来たら、オレの名前を言えよ！」と、私は殴られない方法を教えてくれました。そんな攻防の中で、少しづつ明大社学同の人々が、中大を拠点にしながら明大社学同の再建をしていくようでした。

の方法としての学生大会による解決は無視されたことが判りました。明大の学費闘争を、どのように全国的な自治会運動の今後に結び付けていくのか。という点において、スマートな集約を保持して、全学連のヘグモニーを社学同窓が引き続いだ主導した、そんな思いがブントの指導部にあつたのでしょう。ヘグモニーや中核派との競合に眼を奪っていたのかもしれません。

それが反ブント・ブントつぶしの明白な論理となつて

来たら、オレの名前を言えよ」と、私に殴られない方法を教えてくれました。そんな攻防の中で、少しずつ明大社学同の人々が、中大を拠点にしながら明大社学同の再建をしていくようでした。

これまで党派活動を拒否していた私に早稲田のMさん
が、「こんな時だから社学同と一緒に再建しないか?」
とさそい、オルグして来ました。そうか、こんな時だから
ら、新生・再生、可かを主な生きるから てしまふ。そん

全學連内の矛盾を一気に爆発させたようでした。もともと三派全學連自身、左翼反対的な結集でしかない思考方法になっていたので、他者を批判することによって自己を肯定し正当化する論理方法だったからです。反民青、理事会側と妥協したという署名に名をつらねた當時の中反日共に加えて「反アント」として中核派を元気づけました。責任追求ということで、翌日からアントとみると、殴られ、自己批判を迫られるという事態に至りました。

て、私自身も傍観者でなく、もう一歩踏み込むところから考える時なのかもしれない。改良、革命そして民主主義、この三つの言葉を、2・2協定の中で考えたことはとして、これからも考えることにしよう、そんなことを考えながら、社学同の加盟書にサインしました。多分、それは、今につながる人生への出発だったような気がします。

執委員長他数人の人々は蒸発したようく消えてしまいま
した。他党派に自己批判しつつ、ボス交した奴らを許さ
んと、早稲田社学同を中心にして走りまわって、斎藤執